

軟口蓋過長症

動物が体温を下げる場合、呼吸は重要な要素であることは皆さんご存じですね。暑くなってきましたから、「ハアハア」しているワンちゃんが増えてきています。この呼吸様式をパンティングと呼ぶのですが、これがうまくできないと体温が下がらず、熱射病を発症してしまうこともあります。このパンティングがうまくできない例の一つとして、「軟口蓋過長症」という病気があります。

軟口蓋とは、上顎の硬口蓋の奥にある柔らかい部分です。この領域が垂れ下がっていて、気道の入り口である喉頭にかぶっている状態が「軟口蓋過長症」です。呼吸時、特に吸気時にこれがじゃまするために、努力性の呼吸をしなくてはならないのです。この時出る音を「喘鳴音」といいますが、寝ているときの「いびき」と同様のものです。ですから「喘鳴音」や「いびき」を出す場合は、この病気の可能性が高いわけです。問題は音ではありません。その分、呼吸に負担がかかっているということです。パンティングによる熱放散がうまくいかず、熱射病に陥ってしまったり、興奮時に呼吸困難を生じたりする可能性があるわけです。また、気管に疲労がかかり、気管虚脱という病気になりやすいとも考えられています。この病気は先天的なもので、短頭腫の犬や猫（犬ではブルドッグ、ペキニーズ、シーズー、ボクサーなど、ねこではペルシャ、ヒマラヤンなど）で見られます。

この病気の管理は、程度によって異なりますが、肥満は病状を悪化させる因子ですから、程度にかかわらずこの病気の疑いがある場合は太らせてはいけません。そして、運動を避け、涼しい環境に置いてあげることです。それでも生命に関わるような場合には、手術が必要になります。呼吸のじゃまをしている軟口蓋の下垂部分を切り取る手術を行います。以前は、はさみで切り取り、その部位を縫合するという方法でしたが、今はレーザーメスや超音波メスを用いています。レーザーメスや超音波メスの場合、切除時の出血はほとんど無く、縫合する必要がありません、そして手術後の腫れも軽度です。短時間で安全な手術ができます。ちなみに当院では炭酸ガスレーザーを用いています。ただし、この病気の場合、鼻孔の狭窄を伴っていることもありますので、同時にその手術を行うこともあります。

うちの子は「いびきがうるさい」を感じられている方は、この病気を疑ってみてください。そして重篤な症状を呈する前に対処してあげましょう。